

沖縄県医師会報インタビュー

琉球大学 第2内科 教授 益崎 裕章

質問1：就任の感想、今後の抱負

2009年10月1日付けで琉球大学 第2内科 教授に着任致しました益崎 裕章で御座います。沖縄県医師会の諸先生方に 謹んで御挨拶を申し上げます。琉球大学 医学部 内科学教室 は第2内科が その礎を築き、のちに 第1内科（現：藤田 次郎 教授）と第3内科（現：大屋 祐輔 教授）が 枝分かれして 立ちあげられた と伺っております。沖縄県内外に数多くの優れた人材を輩出し、沖縄県の医療に貢献してまいりました伝統と歴史に育まれた 名門教室 を引き継がせて戴く御縁に恵まれ、大きな責任 と 大きな未来 を前に、誠に身の引き締まる思いで御座います。着任から3カ月半が経過致しましたが、日々、沖縄の人々の 温かさ、純朴さ、優しさに癒され、日本人が置き忘れてしまった大切なものが 沖縄の地に しっかりと残っていることに感激し、素晴らしいところに赴任させて戴けたことを心から嬉しく思い、感謝、感謝の毎日をごしております。

琉球大学 第2内科は 初代 三村 悟郎 名誉教授、第2代 高須 信行 名誉教授の卓越した御指導のもと、内分泌代謝内科、循環器内科、血液内科の各分野にわたる臨床、教育、研究を担当し、沖縄県の医療、医学教育、医学研究において重要な役割を果たしてまいりました。第3代教授を担当させて戴く私の役目は 権力ではなく“徳”で教室を纏め、教室に集う先生方を幸せにすること、沖縄県医師会の諸先生方との親睦、融和を深め、人材・医療・学術的交流を促進していくこと、新時代の要請に応える質の高い医療と医学教育を提供し、沖縄県の皆様に喜んで戴くこと、そして、沖縄の地でこそ実現できる独創的研究を展開し、その成果を日本・世界に発信していくことではないか と考えております。

私は平成元年に京都大学 医学部を卒業し、平成4年に京都大学 第2内科 大学院博士課程に入学（井村 裕夫 前 京都大学 総長、中尾 一和 京都大学 第2内科 教授）、平成8年に大学院を修了、医学博士を取得しました。その後、平成12年からの3年間、米国のハーバード大学 医学部に留学致しました（ジェフリー・フライヤー教授；現ハーバード大学 医学部長）。この間、一貫して 代謝・内分泌病学 の臨床、教育、研究に携わり、特に、脂肪細胞の機能調節や視床下部のエネルギー代謝調節に関わる新規の分子メカニズムの解明、さらに、肥満症・メタボリックシンドロームに対する新しい診断法・治療法の開発研究に従事致しました。大講座時代の京都大学 第2内科には 内分泌代謝内科のみならず 動脈硬化・高血圧グループ、循環器内科、腎臓内科、血液腫瘍内科、膠原病内科の各グループが 互いに切磋琢磨しており、内科学全般を俯瞰する 多くの機会に恵まれたことは 私にとりまして誠に幸運でありました。日本内分泌学会を創始した教室から着任致しました者として、沖縄県における 内分泌・代謝内科領域の医療、医学教育、医学研究の発展と隆盛に貢献できれば と願っております。

琉球大学 第二内科 着任の年、2009年は 私にとりまして 医学部卒業後20年目の節目の

年であったと同時に、米国では史上初の黒人大統領が誕生し、我が国では政権交代が現実のものとなるなど 変革が地球規模で大きな うねり となった年でも ありました。激動する医療環境の中にあっても 変化を恐れず、新しい海に漕ぎ出して行く勇気を失わず、常に進化力とブランド力を持ち続ける “ 輝く医師 ”、“ 人格・実力相まった優れた医療人 ” を育ててまいりたい と念願しております。第一内科の藤田教授、第三内科の大屋教授、御二人の 素晴らしい先輩教授の御指導を戴きながら 琉球大学の3つの内科が 仲良く 力を合わせ、和と懇親を重んじ、開かれた 内科学教室、アクセスしやすい内科学教室、親しみやすい内科学教室 を創ってまいりたいと存じます。沖縄県医師会の諸先生方におかれましては 新生 琉球大学 第2内科 への変わらぬ御引き立て と 倍旧の御鞭撻を心より御願ひ申し上げる次第で御座います。

質問2：目指す講座運営の方針

希望に溢れた未来を開拓し、内外に存在感を示す教室を創っていくためには 今後とも 沖縄県医師会の諸先生方の御指導と御鞭撻が不可欠であります。新生 琉球大学 第2内科では “ 等しく、皆が幸せに！ ” をモットーとして、個性を尊重し、ひとり、ひとりが望むキャリア・プラン を実現していく多彩な選択肢を用意しております。皆さんに 高度医療人としての誇りと自信を持って戴き、歓声が こだまし、ワクワク感のオーラが放射する 温かい教室・輝く教室 を創ってまいります。意欲あふれる若き医師、若き医学研究者、リサーチ・コーディネーターの皆様の御参画を心より歓迎し、教室員一同、御待ち申し上げます。沖縄県医師会の先生方におかれましては、折にふれて周りに居られる若き医師の皆さんに 新生 第二内科のコンセプトを御話戴きまして、御関心のある皆様には 是非、気軽に教室まで御連絡を戴きたく、御紹介の程、何卒宜しく御願ひ申し上げます（電子メール：ikyoku@ryudai2nai.com 電話：098-895-1145）。

講座運営の要諦 は 人間磨きと人育て にある と考えております。良い仕事を積み重ねていく根本は “ 人間性の良さ ” にあります。第二内科では教室員のチームワーク、信頼、絆 を重視し、（1）良いことを想い、良いことを行う、（2）喜ばれることを喜びとする、（3）互いの良い点を褒めあう、（4）皆で ちから を合わせて 励ましあい、助け合い、正しい目標に向かって進んでいくことで 当初には予想も出来なかったような素晴らしいことが できるんだ という “ 人生や世界に対する信頼感 ” を高めてまいります。どんな綺麗な花でも 水を遣り、愛情いっぱい可愛がって育てていかないと やがては枯れてしまいます。人育て も まったく同じと考えます。

診療・教育領域 と致しましては 昨今、沖縄県で特に増加が著しい糖尿病や肥満症をはじめ、間脳下垂体疾患、甲状腺疾患、副腎疾患、骨カルシウム代謝異常、性腺疾患など、内分泌代謝疾患のスペシャリストを養成する 内分泌代謝内科グループ、難治性不整脈に対する高度先進医療を担当する循環器グループが活動しており、加えて、つい最近、概算要求が承認された 琉球大学 医学部 骨髄移植センターの稼働に伴う 血液内科の再生を目指して 鋭意、陣容を準備中であり

ます。また、従来、琉球大学 医学部附属病院の3つの内科学教室の中で担当科が空白となっておりました 膠原病内科 に関しましても 今後、第2内科で担当していきたいと考えており、構想を進めております。

琉球大学 第2内科は 日本内科学会、日本糖尿病学会、日本内分泌学会、日本甲状腺学会、日本循環器病学会、日本老年医学会の専門医、研修指導医の養成・研修施設として認定されており、日本肥満学会の “肥満症 専門診療施設” にも沖縄県で唯一、指定されております。また、琉球大学 第2内科では“女性が輝く教室”をキー・コンセプトとして、育児・家庭と 女性医師としてのキャリア・アップやブランディングを両立させるため、“女性医師による女性外来” や “パート医員制度” などの斬新な仕組みを用意し、志を持って医師になられた優れた女性医師が 生涯にわたって沖縄県民の皆さんに役立っていただけるシステムを構築してまいります。琉球大学 第2内科学教室が沖縄県医師会の諸先生方、沖縄県民の皆様にあいさされ、心の拠り所となる 温かいプラットフォームであり続けられるよう 誠心誠意、精進してまいります。

質問3: 若い医師の メジャー離れ に対する対策、意見

医療の原点は “個々の病気を診るだけではなく、個体の中で生じている疾患を全身の中で捉える、患者さんの背景因子を含めて 病気を総合的に診ることにある” という概念に 大きな異論はない と思いますが、若い医師を取り巻く現在の環境は 玉石混淆の情報過多に陥っており、ともすると 自分の心の声に耳を澄ませ、自分で考え、自分で意思決定していくという習慣が希薄となり、激変を続ける医療環境の中で いたずらに 先行きの不安 を煽られ、小さく纏まってしまいう傾向に席卷されているように見受けられます。“メジャー離れ現象” の基本対策と致しましては、まず、医学部教育の早い段階から “病気を診るのではなく 病めるひと を診るのが 医師の本分 である” という基本姿勢を徹底して教育すること、さらに、医師という職業が人生を賭けるに値する 働き甲斐に溢れた 素晴らしい職業 であるということを 多様なチャネルを通して 教えていく、示していくことが重要であります。メジャー領域の先輩医師を見て、若い医師達が “私も 是非、先生方のように なりたい！” という憧れを抱くかどうか…。そういう意味ではソクラテスの時代から繰り返されてきた “今どきの若い者は…” という嘆きに留まらず、“私達は どうなのか？ 後輩医師からの憧れの対象となるような 魅力的な 医療人たり得ているのか？” という 謙虚な自問、振り返りも不可欠でありましょう。先輩医師が 誇りと自信にあふれ、生き活きと輝いている姿を見せることは若手医師の進路決定において 極めて重要な鍵を握っております。

琉球大学 第二内科が担当する 内分泌・代謝領域の疾患は 元来、臓器間の機能連関や恒常性維持のために備わっている ホルモン(内分泌)、神経、免疫 というシステムが 病的に破綻した状態 と考えることが出来ます。糖尿病も肥満も高血圧症も皆、同様です。“全身を診ることを通して個々の病気の本質に迫る” という姿勢を教えるという意味において、例えば、内分泌代謝病学の真髓や真骨頂を医学生や初期・後期 研修医の皆さんに未来展望を持って魅力的に、面白く伝

えることが出来れば 状況は かなり 好転するのではないのでしょうか。世界屈指のパワー・スポーツである沖縄の土地柄、風土、そして沖縄の優れた研修システムの魅力に引き付けられ 日本各地から多くの初期・後期研修医が沖縄に集まっていますが、研修後も沖縄県に残る方は 残念ながら そう多くはない と伺っております。内科診療は医療の中核、基本であり、内科学は医学の王道 であります。若い医師をメジャー系へと導く試みが実を挙げるには 琉球大学 医学部と沖縄県医師会の効果的な連携が非常に重要な意味を持っており、私も精一杯、汗をかきたいと 考えております。

質問 4：沖縄県における肥満、糖尿病の増加、平均寿命急落に対する意見、提言

エイズや新興感染症と並び、糖尿病や肥満が世界を巻き込むパンデミックとなりつつあります。インスリンやレプチン、アンジオテンシン II などのホルモンは過酷な進化の過程で 飢餓 に対する生体応答や早魃 に対抗する水分・電解質の保持のため なくてはならないサバイバル・システム として機能してきましたが、高脂肪食、塩分過剰、運動不足、過剰ストレスに曝される現代社会にあっては肥満症の病態形成に関わる 悪役 に豹変しています。フランス料理が始まって僅かに 200 年、環境の変化に適応して遺伝子が変容するには 少なくとも 10 万年かかることを考えると 人類は当面、糖尿病・肥満症の災禍に対峙せざるを得ないと言えます。アメリカ型の食とライフスタイルが流入した結果、世界に冠たる長寿の島、沖縄でも 僅か一世代の間に平均寿命が急落する という異変が生じておりますが、この“沖縄クライシス”を招いた複雑要因を分子栄養学、統合生理学、分子疫学などの視点から解き明かし、近未来の日本クライシス、アジア クライシスをうまく回避させることができるかどうか？ このテーマは 琉球大学第二内科に着任した私に課せられた“遣り甲斐に満ちた ミッション”であると直観しております。実に 壮大なプロジェクトであり、目的の達成のためには 沖縄県医師会、行政、保健、栄養、教育現場の諸先生方と琉球大学との効果的連携、タスクフォースの整備が不可欠であると考えております。

私は 糖尿病・肥満症の病態解明と新規治療法開発のヒントを 長い間、受動的なエネルギー貯蔵庫 と考えられてきた脂肪組織の中に見出してまいりました。健康人の体脂肪率が 20 ~ 25 % であることを考えると、脳を含む全身に向けて多彩なバイオシグナルを発信する脂肪組織は“生体最大の内分泌臓器”と考えることができます (*Diabetes* 1995, *JCEM* 1997, *Nature Medicine* 1997, *Diabetes* 1999, *Diabetes* 1999, *J Clin Invest* 2000, *J Clin Invest* 2000)。脂肪細胞ホルモン、レプチンを介して脂肪組織が視床下部に伝える“あなたは これ以上食べなくても良い”という情報は人工的な 高脂肪食 の前には いとも簡単に攪乱されることが明らかとなり、脳における摂食シグナルの全容解明とレプチン抵抗性の解除法 が次世代 抗肥満治療薬の標的となっております (*Diabetes* 2005, *Cell Metabolism* 2005, *Cell Metabolism* 2007)。また、過栄養やストレスは脂肪組織のコルチゾール代謝を活性化させ、内臓脂肪の増加や異所性脂肪の蓄積を加速させることが明らかとなっております (*Science* 2001,

J Clin Invest 2003, *Diabetes* 2004, *Endocrinology* 2007, *Am J Physiol* 2009, *Am J Hypertens* 2010)。遺伝子操作動物における研究成果はヒトの肥満脂肪組織でも既に検証されており、標的となる酵素阻害剤の開発がメタボリックシンドローム治療薬として世界規模で進められています。私が今日まで取り組んでまいりました医療・医学研究のあゆみが“沖縄クライシス”の解決に向けた推進力のひとつとなるよう、誠心誠意、精進してまいりたいと思います。

質問5：県医師会との連携に関する意見、要望

“沖縄クライシス”をはじめ、沖縄県が直面している深刻な医療問題の数々に対していかにして最適解を導き出すか、いかに沖縄県の医療を向上させられるか、その成果をいかにしてオールジャパン、インターナショナルに発信できるか? ...今、内外から熱い視線と注目が寄せられております。高邁な理想のもと、斬新な枠組みで沖縄県医師会の先生方と琉球大学第2内科の連携をスタートするとすればまさしく今がベストタイミングであり、周辺の諸状況も待ったなしの緊急事態と言えます。ピンチが最大のチャンスであることは歴史が教えるところでもあります。医療・学術の交流、意見交換の場を積極的に設け、双方に益する“ウイン・ウインの関係”を鋭意、構築してまいりたいと願っております。

スーパーローテーション研修制度の“負の影響”として、初期診療偏重や専門医の取得に過剰な価値が置かれ、反面、学術的活動の軽視という風潮が広がっております。その結果、学会や研究会の場で論理的に症例報告が出来ない若い医師、論理的な議論や意思決定が出来ない若手医師が急速に増えていることが憂慮されております。今後、琉球大学第二内科と沖縄県医師会の重要な連携のひとつは、一定の時期に若い医師を大学で御預かりしてしっかりと教育し、自分で考え、自分で問題解決する学術的トレーニング(医学博士の取得を含む)を積んだのち、再び、一線臨床の場に御返しするという好循環を構築することです。人材育成は100年の大計であり、琉球大学と沖縄県医師会の連携によって臨床の各分野における優れたリーダーを着実に育てていく体制作りは急務の課題と感じております。

診療におきましては大学病院での入院・診療が望ましい患者さんの積極的な御紹介を何卒宜しく御願い申し上げます。BMIが35を超え、減量困難性や種々の健康障害を併発されている超肥満の患者さん、1型糖尿病を含む血糖コントロール不良の患者さん、女性医師の診察・診療を御希望になる女性患者さん向けの女性医師による女性外来への御紹介(骨粗しょう症、月経不順、更年期症状、甲状腺疾患、動脈硬化性疾患など)、成人成長ホルモン分泌不全症やクッシング病、下垂体機能低下症、アクロメガリー、下垂体炎など種々の間脳下垂体疾患、種々の甲状腺疾患、アルドステロン症やクッシング症候群、褐色細胞腫、偶発腫瘍の精査など一連の副腎疾患、原発性副甲状腺機能亢進症や低下症などの骨カルシウム代謝異常、難治性不整脈の患者さんなどを含め、是非、御紹介を賜りたいと存じます。先頃、琉球大学第2内科では沖縄県で初めての持続血糖モニターシステム(CGMS)を導入し、看護師、栄養士、薬剤師とのチーム医療体制のもと、糖尿病教育入院システムや“ブリットル型糖尿病”の治療モード最適化入院、超肥満患

者に対する減量・教育入院プログラムを充実させております。

Hospital という名前の通り、病める患者さんが過ごされる病院に 最も必要なものは Hospitality、すなわち 心が安らぐ おもてなし のところ と 快適性であります。琉球大学 第2内科 病棟 (9階西 病棟)には 多和田 久美子 師長、山川 房江 栄養管理室長、砂川 智子 病棟薬剤師をはじめ、誠に素晴らしいスタッフが 勢揃いしており、チーム医療の実践を通して“患者さんに優しく、こころ が ほのぼのと温かくなる 居心地の良い病棟 ”を目指して 一同、心を合わせ、日々の工夫と向上に励んでおります。守旧的、権威主義的な 従来の大学病院のイメージ は 現在の第2内科病棟からは 一掃されておりますので、是非、御気軽に 患者さんの御紹介を賜りたいと存じます。必ずや、“ 変革の息吹 ” を感じ取って戴けるもの と自負致しております。近未来には沖縄県の患者さんの調査 等で 沖縄県医師会の諸先生方の御力添えや御助言を賜る機会が一層、増えてくるものと考えております。沖縄県医師会の諸先生方におかれましては 新生 琉球大学 第2内科 への御支援と御引き立てを 今一度、心より御願ひ申し上げる次第で御座います。

質問6：座右の銘、日頃の健康法、趣味など

座右の銘：

生き残った種(しゅ)は 強い種でも 大きな種 でもない。

(環境に適応して) 変化(進化)を遂げた種 だけ だ。

(『種の起源』より。 チャールズ・ダーウィン 英国(1809年~1882年))

日頃の健康法：

すべてに感謝。“有難う”という言葉 を 多用 する。イライラしない、慌てない。消化管に長く 留まる雑穀米や野菜繊維を多く摂るように、また、身体を温めること、ゆっくり湯船に浸かる御風呂を心掛けています。沖縄の太陽エネルギーを受け取る日光浴からも たくさんのパワーを戴いております。

趣味：

音楽と旅行。着任後の凄まじい忙しさから職場と住まいの往復のみで 沖縄の名所・旧跡を訪れる時間が取れませんでした。これからは ゆっくりと沖縄の文化を味わっていきたくと 楽しみにしております。

略歴：

平成元年 4 月

京都大学 医学部 卒業

京都大学 医学部附属病院 研修医

平成 2 年 4 月

高槻赤十字病院（大阪府）内科

平成 4 年 4 月

京都大学大学院 医学研究科 博士課程 入学（分子医学 専攻）

平成 8 年 3 月

京都大学 医学博士

平成 11 年 10 月

京都大学 医学部 内分泌代謝内科 助手

平成 12 年 4 月

ハーバード大学 医学部 招聘博士研究員・客員助教授（日米政府交換留学）

平成 15 年 12 月

京都大学 内分泌代謝内科 助手（復職）

平成 20 年 7 月

京都大学 内分泌代謝内科 講師

平成 21 年 10 月

琉球大学 第二内科（内分泌代謝内科学分野）教授

主な受賞

木村記念循環器病財団 最優秀 学術賞（平成 9 年）

日本臨床代謝学会 学術奨励賞（平成 10 年）

成人血管病研究振興財団 岡本記念研究奨励賞 最優秀賞（平成 10 年）

日本内分泌学会 研究奨励賞（平成 13 年）

日本肥満学会 肥満学会賞（平成 14 年）

ファイザー 内分泌研究賞（アメリカ合衆国）（平成 15 年）

日本心血管内分泌学会 高峰譲吉 研究奨励賞（平成 16 年）

アストラゼネカ 国際研究賞（心・循環 領域）（英国）（平成 17 年）

専門分野、主な研究領域

糖尿病学、内分泌代謝学、肥満学。

肥満における脂肪組織の機能異常（2）視床下部によるエネルギー代謝制御
ホルモン・自律神経系による臓器連関 に焦点を当てた 糖尿病・肥満症の
病態解明 および 新規治療法の開発。